『聖書は大ドラマである』　１０月

# 【目次】

# ［10月１日］　カナの婚宴（ヨハネ２・１～11）

3母、イエスに言ふ「彼らに葡萄酒なし」。

4イエス言ひ給ふ「女よ、我と汝と何のあらんや、わが時は未だ来らず」……

7イエス　僕に「水をに満たせ」……

9、葡萄酒にりたる水をめたり……

11イエスこのをガリラヤのカナにて行へり。（ヨハネ２・３、4、7、9、11）

イエスの故里ナザレの東北方のカナの村に婚宴があった。母マリヤばかりでなくイエスと弟子たちも招かれた。相当の人数が婚宴に招かれたと見えて、途中で葡萄酒が尽きたので母がイエスに告げた。ところがイエスは母の言に対してそっけないような答を右の如くした。キリストは唯天の父の御意に従うのみで、母に無責任な答をしなかったのである。キリストの「わが時」はいつも神の時なのである。勿論母の言を聞いた次の瞬間にイエスは心の中で祈った。祈りの中で父のみ旨が来た。食事に用いる水甕が六個あったので、それに満水を僕どもに命じた。満水と同時に天来の力が臨んだ。水は葡萄酒にった。饗宴のところへ葡萄酒が運ばれた。

さきの酒よりこの酒の方が味が優れているではないか。驚いた。饗宴長は新郎を誉めた。彼にはキリストに於いてはたらいたみ霊の愛の力などわからなかった。弟子たちも驚いた。これがキリストの愛の力の第一の徴であった。実にイエス自身が父なる神の最大の徴でそれが自在に言行に於いて徴として現れる伝道であった。水は霊水になる。大気は霊気になる。言は霊言になる。歌は霊歌となる。医術は霊術となる。キリストの中に深く祈り入り、我々自身キリストの徴とならん。

# ［10月２日］　イエスとサマリヤの女（ヨハネ４・３～42）

13「この水を飲む者は誰でも渇く。

14だが私が与える水を飲む者はいつでも渇くことがない。私が与える水はその人の中で湧きでる泉となって永遠の生命をもたらす。」　　　　　　21「女よ、私に信頼せよ。この山でもエルサレムでもなく、お前たちが父（なる神）を拝する時が来る。

23まことの礼拝者たちが霊とを以て父を拝する時が来る、今もう来ている」。（ヨハネ４・13、14、21、23）

ユダヤからガリラヤへの途次、サマリヤのスカルという町にイエスは立ち寄った。そこには有名なヤコブの井泉がある。サマリヤの女が水を汲みに来たので、イエスは

「飲ませてくれ」

とたのんだ。女は

「あんたはユダヤ人なのに何で（仲の悪い）サマリヤの女に飲ませてくれなどと言いなさる。」

問答がつづく。イエスは右掲の言を吐露した。イエスの与える水は、霊水である。即ち聖霊である。問答の中で、イエスは彼女の素性をずばりと言ったので、女は驚き、イエスを預言者だと告白する。

イエスは、礼拝所は「此の山」ゲリジムでもなくエルサレムでもない。本山は到る処にあり、時刻はいつでもよし。という真の礼拝・真の宗教が何であるかをずばり喝破した。「霊と真」を以て、とは「聖霊に在って本気で」ということだ。女はすっかり驚きよろこんで町へ走っていって

「来てごらん」

と人々をイエスのみ許に伴れてくる。まことにキリスト自身が神殿。我々自身が聖霊の宮。生活そのものが礼拝ということだ。

# ［10月３日］　無者キリスト（ヨハネ５・19～47）

20父は子を愛してそのなす所をことごとく子に示し給ふ。

30我自ら何ごともなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し。そはわがを求めずして、我を遣はし給ひし者の御意を求むるにる。

39汝らは（旧約聖書）に永遠の生命ありと思ひて之をしらぶ。されどこの書物は我につきて証しするものなり。（ヨハネ５・20、30、39）

普通は信仰が一種の信念で、精神的統一をもった力だと思っている。ところがイエスはそんなことは言わない。彼はひたすら父に祈り入って、父から聞き、父を見、存在的には父のふところに入って一如一体となっている。だから父から力ある言を賜ってそれを語り、力ある業を行ぜしめられるだけである。であるから

「わが教はわが教に非ず、我を遣はし給ひし者の教なり」（ヨハネ７・16）

と言っている。イエスは彼自身、無能、無意、無言、無教の人である。それで私はイエスのことを無者と申している。自分を何者ともしないでただ父なる神一切、一点張の人である。それで霊界からの無限無量な言、行が展開した。福音書のおどろくべきドラマの中のキリストの言葉も行為も全く神の力に源泉がある。力と光と生命と智慧と義と愛に満ち溢れている人である。無即無限無量者たる実存だ。だからこのキリストに降参して、キリストの中に全身投入すると、ふしぎなことになる。投入の門は十字架、そこを平伏して通ると詩篇第23篇の如き自由の天地が展けてくる。

# ［10月４日］　我は生命のパンなり（ヨハネ６・22～71）

33「神のパンは天より降りて生命を世に与ふるものなり。」

35「我は生命のパンなり、我に来たる者は断じて飢えず、我に信じいる者は断じて渇かず。それ我が天より降りしは、わがをなさん為にあらず我を遣はし給ひし者の御意をなさん為なり。

40わが父の御意はすべて子を見て信じ入る者の永遠の生命を得る是なり。我れ終末の日にこれを復活せしめん。」

53イエス言ひ給ふ「誠に誠に汝らに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし。」（ヨハネ６・33、35、40、53）

キリストは我々に永遠の生命を与えたくて仕方がないので、このヨハネ第六章で徹底的に語りかけている。神の欣び給う（単数）（６・28）はキリストの中に信入することだ、と。即ち信仰即行で霊的に全身的に信じ入ることが業だという重大な言である。信仰即信行即信交である。それはもっと烈しい表現では、

「自分は天来の生命のパンだから食べろ、神の羔だからわが肉を喰らい、わが血を飲め」

という。キリストの霊的生命を砂漠の宗教らしく具体的な血と肉で語っておられる。キリストを食べれば永遠の生命となる、という。そしてキリストと生命的一如の関係に入る。エン・クリスト（キリストの中に）という一体の霊的現実である。こういう信即行という全身的消息が使徒たちの信仰の現実であった。聖餐式ではなく、霊的現実で

「主よ、あなたは私の血の血、肉の肉です」

と告白するのだ。

# ［10月５日］　キリストの栄化（マタイ17・１～８、マルコ９・２～13、ルカ９・28～36）

1六日の後、イエスはペテロ、ヤコブ及びその兄弟ヨハネを伴れてひそかに高い山に登った。

２かくて彼らの前で変貌し彼の顔は太陽の如く輝き、彼の衣は光の如く白くなった。

３すると見よ、モーセとエリヤが彼（イエス）と語るのが彼らに見えた。

4……。

５彼（ペテロ）がなほ語っているうちに、見よ光る雲が彼らを掩った。すると見よ、その雲から声があって言う、「これはわが愛する子、我これをいたく悦ぶ、汝らこれに聴け」と。

６弟子らはこれを聴いて平伏し、いたく恐れた。７イエスは近づいて彼らに触れ「起きよ、怖れるな」。（マタイ17・１～７）

これは「変貌の山」の記事だが、ピリポ・カイザリアでの弟子たちとの会話で、彼がメシヤ（キリスト）であることを弟子たちに語ってから一週間前後のことで、高い山というのはおそらくその北方のヘルモン山だと思う。白雪をいただくこの世ばなれした神秘的な山で、彼が祈り給うや右掲の如きに栄化し給い、旧約の代表的人物モーセとエリヤが現れた。そしてイエスの十字架の死のことが語り合われた（ルカ９・31）。ペテロはイエスとモーセとエリヤのために三つの幕屋を張りましょうなどと（マタイ17・４）ペテロらしい思いつきを口走った。その間霊雲が彼を掩うと見るや、イエスのヨルダンに於ける受洗の時と同じ天来のみ声がひびいて来た。三人の弟子は平伏した。イエスは彼らに按手して起こしてやった。このキリストの霊的栄化は正に復活のキリストの予徴であった。

# ［10月６日］　「ペテロの魚」（マタイ17・24～27）

彼らを躓かせぬ為に、に往ってを垂れ、初めに上がる魚を取れ、その口を開くと銀貨を見出す、それを取り出して、私とお前の為に彼らに納めよ。（マタイ17・27）

この記事はマタイ福音書特有のものである。これはガリラヤ湖北岸の村カペナウムの岸辺の出来ごとである。収税人どもにペテロは神殿納金のことをかれた。「あんた方の先生は納金を納めないのか」と。イエスがメシヤだとの噂が立ちはじめていたからである。ペテロは「納めるよ」と答えた。その問答を早くも察知したイエスはペテロに

「シモンお前はどう思うか、世の王たちは税やを誰から取るか、自分の子からか、庶民からか」。

ペテロは答えて、

「庶民からです」。

イエスは

「そうかそんなら（神の）子（自分）は自由だ」。

だけれども、彼らを躓かせない為にと言って右掲のふしぎな指示をした。「銀貨」と訳した原語は「スタテール」で、一シケル銀貨のことである。半シケルは二ドラクマで、ユダヤ人は二ドラクマ納税をエルサレム神殿になす義務があった（出エジプト30・13以下参照）。この魚の口から出た銀貨は一シケルで四ドラクマになるから二人分の納税金に相当する。こういうふしぎな魚が釣にかかることを看破するキリストは全く大変な人である。（後略）

# ［10月７日］　童心の天国（マタイ18・１～４、マルコ９．33～37、ルカ９・46～48）

我誠に汝らに告ぐ、汝らりての如く成らずば、天国に入るを得じ。（マタイ18・３）

山から降りてくる道すがら弟子どもは天国で大なる者は誰だろうなどとくだらぬ話合いをしていた。カペナウムに辿りつくと、イエスは十二弟子を呼んで（マタイ９・35）、になろうとう者は、人々のとなれ、と諭した。そして幼児を抱いて、右の言を語り出でた。幼児、あの幼稚園の児童たちの言動は全心即全身的で、心身一如のあり方、動き方である。キリストはあのような全的在り方を尊重した（マルコ10・３～16参照）。そして

幼児たちの守護天使は天に在ますわが父のみ顔をつねに見ている。（マタイ18・10）

という霊的消息を語った。幼児は単純に神さまを信じ、心から祈る。こういう存在を侮ったり、躓かせたり、いつわったりする者は

大なるをに懸けられて海のに沈められた方が好い。（マタイ18・６）

などと烈しい言をキリストは吐いた。

「幼兒の如く」とは、瞬間に全存在をいつわりなく投ずる生き方である。あるがまま太陽の如き心根で言動する在り方である。神・キリストの前にぶっつぶれた砕けの心根である。キリストの愛に圧倒されて聖霊に燃えている生きざまである。どんな芸術家も学者も、政治家も軍人も、医者も実業家も、教育者も会社人もいかなる天職の人も、本当に天的童心を以てうちこむ人には偉大性が具わる。男も女も童心なくしては天国に入れない。

# （詩）幼兒の如く（マタイ18・３）（作詞：1980.11.6）

 歌調Ｓ538「すぎゆくこの世」」

１．母の乳房を 吸う兒の如く

主のみ霊をば 飲みてぞ生くる

２．母がすべての をさなごの如

わが身を全く 主に投げ入れぬ

３．主のふところに 祈り入りてぞ

み霊は臨み 力に溢る

４．エン・クリストに 生くるわが身に

み霊の力 みなぎりあふる

５．み霊の流れ 脈々たれば

み民われらは 生命の泉

６．み霊の 炎々たれば

何をかのぞまん 力ぞみつる

７．いざや我らは 燃ゆるみ霊を

に宿し を点さなん

# ［10月８日］　幕屋の原相（マタイ18・20）

二三人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る。（マタイ18・20）

この聖言はマタイ福音書だけにある。神・キリスト・我という縦の垂直関係は、聖霊の媒介によって四位一体的に成り立つ。これが宗教的実存の原相である。

キリストの右掲の聖言は、エクレシヤ（教会、召団）の原相である。キリストの名の中へと入るためには聖霊が臨んでいなければならない。聖霊内住の前提的土台は十字架の贖罪を体受するところに在る。右の事態を図形的に表現すれば、十字架の柱を中央に立てて、三角垂体の幕屋（天幕）を張ると、頂点をＳ（十字架の頂点）としたＳ－ａ、ｂ、ｃ（ａｂｃは平面上の各個人）という一番単純な三角垂体の幕屋が張れる。幕屋の空間は聖霊が充満している。私はこのことに一九四二年三月八日にヒルティーの『眠られぬ夜のために』の第一巻のこの日付の処の最初のくだりを読んだとき霊感の如く閃いたのであった。幕屋！という語が。ヒルティーはそこで

「キリスト教団は未だ嘗て一度もその創設者の考えに完全に適合した 　　全く正しい形成を見たことがない」

と言っている。幕屋！　即ちイスラエルに自現したエホバ（ヤハウェー）の神は幕屋を張らせながら民と旅をしている。創世記から黙示録まで、即ち神の歴史は神が人と幕屋をはりながらの旅で、創造の晨から歴史の終末、新天新地の神の国の到来まで、幕屋がエクレシヤの本態である。原相である。キリストのこの聖言がそれを指示している。

# ［10月９日］　愛と永遠の生命（ルカ10・25～28、マタイ22・34～40、マルコ12・28～31）

27彼（教法師）答えて言う「汝主たる汝の神を愛せよ、汝の全心で、汝の全魂で、汝の全力で、また汝の全念で。そして隣人を汝自身の如く愛せよ」と。

28彼（イエス）言い給う「正しく答えた、汝これを行へ、そうすれば生きる。」（ルカ10・27～28）

或る教法師がイエスを試みる作為で、「先生、永遠の生命をぐには何をしたら」とねた。イエスはに何とあるかと反問した。教法師の答は右掲の如くであった。これは旧約の申命記６・４の「聴けイスラエルよ…」のひとくだりにある句でユダヤ人なら幼児も暗誦できるもの。「隣人を汝自身の如く」はレビ記19・18下の句である。すると教法師は己れを義とせんとして「隣人とは誰ぞ」とまた設問した。これに対してイエスはかの有名な「憐れみ深いサマリヤ人」の話をした（ルカ10・29～37）。教法師は完全にやっつけられたわけである。

イエスにとっては宗教・道徳は実践の世界のことで、実存に裏づけられていない道徳や信仰論は空しいことをこの教法師たる偽善者、パリサイ人に示したわけであった。恵・信・言・行一如の実存構造が身につくまでは所謂信仰も空しい。まず神・キリストの恵みが何たるかを福音書のドラマに体当たりして体感することだ。キリストの言は言霊で力をもっている、彼の行為もみな愛の力の現れだ。極まるところは十字架の贖罪死、永遠の生命の実証たる復活、愛の力たる聖霊の降臨。是れらに圧倒されると、聖霊の力がくる。かくて恵・信・言・行一如の消息が身についてくる。この愛こそ永遠の生命の実質である。

# ［10月10日］ 深処に漕ぎ出でよ！（ルカ５・１～11）

４「にぎ出でよ！ 網を下ろしてれよ！」

５「先生！　夜通しやってみたんですけれど、らっきし駄目でした。だけれど、御言通りに網を下ろしましょう！」（ルカ５・４～５）

イエスはに寄せてあったペテロの舟に乗って、舟の中からに蝟集して来た群衆に福音を語った。語り終わると、ペテロに

「深処に漕ぎ出でよ！　網をおろして漁れよ！」

と命じた。ペテロは右掲の如く答えた。漁獲にかけてはのペテロである。のイエスの言は普通なら「何をおっしゃる」といって拒否されるところだ。前夜のから判断してダメだと思ったから二艘の舟人は網の整理をしていたところである。

けれどもペテロは信頼する先生の言だ、イエスの言はの宿っている言だ。それで自分の経験も判断も乗り越え打ち消して、

「だけれど」

と言って師の言に信従した。すると驚くなかれ大漁ではないか。もう一艘も呼び寄せたが、二艘の舟も沈まんばかりの大漁とは！　大漁に驚き、師を畏れ

「どうぞ私から離れて下さい、私は罪がある者です、主様！」

とペテロらしい言を放った。

「懼れるな、お前は今から人を漁ることになるぞ」。

大漁は大伝道の徴であった。勿論ペテロはまだまだである。キリストに何度も躓く。復活のキリストにすら躓く。ペンテコステの聖霊降臨を受けて、はじめて本当に眼が醒めた、別人とされた。

「深処に漕ぎ出でよ！」

キリストのこの一言を我々はかと胸に受け、自己を突破してキリストというに突入することだ。するとえらいことが起きる。これを体験体現する人は人生の勝利者とされる。

# （詩）「深所に漕ぎ出でよ！」（ルカ５・１～12に因みて）（作詞：1986.7.31）

 歌調：「卯の花の匂う」夏は来ぬ

１．ゲネサレの の岸べの

群衆に 舟より語る

イエスのみ言 み霊の波

２．「やよペテロ 舟をに

乗り出だし 網をおろせよ

り大ならん いざ往けよ」

３．「 労したれども

らに 漁りしのみ

されども み旨に従はん」

４．こは如何に 大漁のために

網は裂け 舟は傾き

二艘の舟に は満つ

５．驚きて ペテロは言へり

「去り給へ 主よわが神よ

み前に堪えず 罪の身は」

６．キリストは ペテロに言へり

「るなよ 汝今より

世の人々を 漁らん！」

７．主よ！　然り 我を否みて

み力を 全身に受け

深き情けの 旅路往かむ

# ［10月11日］　イエスと富める青年（マルコ10・17～31、マタイ19・16～30、ルカ18・18～30）

「なぜ私を善いと言うか。神一人のほかに善い（といえる）者は居ない」（マルコ10・18）

イエスがガリラヤ方面から南エルサレムに向かう最後の旅の途上に青年が走り寄り、づいてイエスにたずねた

「善き先生、永遠の生命を嗣ぐには何をしたら好いですか」

と。ユダヤの青年の問題意識はすばらしい。永遠の生命と行為の関係を問うている。今の日本の青年にこのような問題を問題としている者果たして在りやである。

ところでイエスはまづ何と言ったか。右の言の「善き先生」がイエスの心につっかかった。

「何故私を善いと言うか。善い者は神の他に一人も居ない」

と断乎として喝破した。イエスは自分を何者とも思っていない。無善、無教、無行者なのである。彼は皆神から臨む善、愛、教、言、行を体現しているまでのことである。だから私はイエス・キリストのことを無者と申し上げているのである。

次にイエスはモーセの「十言」（誡）をお前は知っているか、どうだなといた。「幼い時から遵っております」と青年は答えた。イエスは感心だとしんで目を止めて更に言った。

だがなほ一つ欠けているよ、往ってお前の物をみんな売って貧者に施せよ、そしたら宝を天に得る。そして私にいて来なさい！（マルコ10・21）

金持ちの青年は悲しんでを返して去った。イエスは弟子どもに言った、

金持ちが神の国に入るより駱駝が針の穴を通る方が易しい（マルコ10・25）

と。当時「針の穴」という名称の狭い門があったのでイエスはこう言った。金持ちに限らない。凡そ人間は自分の財力、体力、智力、権勢、等々に於いて自分を惜しんでいる。おのれを神有として無者魂になれとのみ旨だ。

# ［10月12日］　マルタとマリヤ（ルカ10・38～42）

なくてならないものは少ない、否唯一つだ。（ルカ10・42上）

多分ベタニヤだと思われるが、ある村にイエスは弟子どもと進んで行った。マルタが外に出て行ってイエスたちを家に迎え入れた。妹のマリヤはイエスが話を始めると足下に坐って御言に聴き入るのであった。マルタはおもてなしのことに心をくばって饗応に忙しい。マリヤが自分を助けないので、イエスのところに来て

「主様、妹が私一人に働かせているのを何ともお思いになりませんか 　　妹に私を助けるようにお命じになって下さい」

と言った。主はこれに対して

「マルタよマルタよ、お前はいろいろなことに心を配り気をつかって いる。だけれど無くてならなぬものは少ない、否唯一つだよ。マリヤは善い方を選んだ、これは彼女から奪ってはならないものだ」

と答えた。これはルカ伝特有の記事である。

マルタは黙っておもてなしに専念していればよかった。イエスはそれはそれで認めなさる。マルタの心は分裂した。マリヤは専らイエスの言を喰っていた。聴くべきときに全身を耳にするのがこの時最善の道であったから、イエスはマルタに右の如く言った。静のマリヤ、動のマルタ、ある時はマリヤとなり、ある時はマルタとなる。静動自在な在り方が本当だ。どの道全的でなければならない。

キリスト者にとって無くてならぬものが唯一つある。聖霊、キリストの霊である。聖霊は無限無量の内実をもつ霊で、これは何ものとも替えられない。わが生命の生命だ！

# ［10月13日］ ラザロの復活（ヨハネ11・１～46）

彼は大聲に叫んだ「ラザロよ、出て来なさい！」（ヨハネ11・46）

イエス・キリストがのみ力で死者を甦らせた例をここに挙げれば、其一は「ヤイロの娘」で、彼女は会堂司ヤイロの十二歳の少女であったが、イエスは深く憐れみ

「タリタ、クミ！」（乙女よ、起きよ！）

と叫んで少女を甦らせた（マルコ５・21～43、ルカ８・40～56参照）。其二は、「ナインの若者」で、ナザレの南東方ナインの町の寡婦の独息子の葬列に出遭ったイエスは、柩に添って泣き顔で歩いているその母親を憐れんで、柩に手を按き、柩の中の若者に向かって

「若者よ、お前に言う、起きよ！」

と叫んだらその若者は甦った（ルカ７・11～17）。

其三がこの「ラザロの復活」である。エルサレムから東方エリコへと下る途上、三粁ほどの地点にベタニヤという村があったが、そこのマルタ、マリヤ姉妹にラザロという兄弟がいたが、彼が死んでしまった。埋葬されて四日目である。マルタはこの時も動的で、イエスを出迎えて問答をした。そのときのイエスの言

我は復活なり生命なり…（ヨハネ11・25、26）

に注目しなければならない。而もイエスは深い涙の人で、この時も涙し給うた、マルタ、マリヤの涙と共に。ラザロの墓場に来て、イエスは天を仰いで叫んだ

「父よ、お聴き下さったことを感謝いたします…」

まだラザロは死んでいるのに、イエスは既に先を見て斯く叫んだのである。そして大声で

「ラザロよ出て来なさい！」

と叫んだ。ラザロは言下に、手足が白い布で巻かれたままで出て来た。何たる驚くべきことか。私もその遺跡を訪ねたが何とも印象深く、キリストの永遠の声が天界から…！

# ［10月14日］　我も汝を罪せじ（ヨハネ８・１～11）（作詞：1979.12.6）

 歌調　Ｓ245「おもひ出づるも」

１．みめ美しく 純情の

女を捕へ 連れ来たり

パリサイ人ら 学の徒ら

イエスのみ前に 曳き出せり

２．「師よこの女 道ならぬ

わざをせし時 捕へける

によれば 石をもて

打つべきなるぞ 如何にせん」

３．師は身をめ 地の上に

もの書き給ふ へせず

偽善者どもは いらだちて

返答を求め 問ひ迫る

４．師は身を起こし 言ひ給ふ

「れらのうちの 潔き者

石を投げ打て！」 かく言ひて

た身を屈め 書き給ふ

５．この言に 胸打たれ

老ひも若きも 手の中の

石を落として 次ぎ次ぎに

姿を消せり 罪びとら

６．師は身を起こし 見給へば

女と師のみ 残りたり

「女よ汝れを 責むる者

に在りや」 「誰もなし」

７．情け深くも キリストは

に手をき 言ひ給ふ

「我もれをば 罪せじな

再びすなよ いざや往け！」

８．人の心を 知り給ふ

主のまなざしは いと深し

きとし あざやかに

現はし給ふ ひつつ！

ヨハネ福音書８・１～11を読者は読んで、この詩（讃歌）を読んで下さい。解説の代わりに自作の讃歌を載せた。

ヨハネ第８章のこの記事はルカ第二一章の終わりにあるべきか、過越の祭の前の一件。

# ［10月15日］　放蕩息子（ルカ15・11～32）

この我が子、死にてた活き、失せて復た得られたり。（ルカ15・24）

にがまじり始めたが窓辺に寄って、野末を見やっている。幾日も空しく過ぎてゆく。何を待っているのか。家には毎日野良に出て働くな長男がいる。気も姿も四角四面だ。と、ある午さがり、陽が西に傾きはじめた頃、はるか彼方にぽつんと動く影。あれは人か獣か。家を出ていったあの次男坊にしてはあまりにも変わり果てた姿ではないか。でを着ている。正に乞食同然の恰好である。痩せ細っているが歩きっぷりからすると次男坊らしい。直感した親仁は家を跳び出して走っていった。七十路を越えた人とは思えぬほどの力強い走り方である。親仁と書くように、正に父の仁が力の秘密であった。

イエスはこの情景を述べて次のように言った

「彼れ（息子）がなほ遠く離れていたのに、彼の父は彼を認め、情動してあわれみ、走っていって、そのに倒れかかるようにして抱きつき、彼に心ゆくまで接吻した」

と。これは砕けた魂の立ち帰りに対する神・キリストの無条件的なゆるしの愛である。

これはルカ福音書第15章の有名な「放蕩息子」の譬話であるから、聖書を読んでことの次第を知って下さい。次男は父から離れて独立を志したはよかったが、神から離れて放蕩三昧でどん底に落ち、

「神と父に罪を犯した」

といって帰って来た。長男は父の許で働いてはいたが、心が父からも神からも離れて自己を義としていた。だから弟が帰って来たのに父と共に憐れんで迎えず、審いた。父の言

「このわが子、死にて復た活き、失せて復た得られたり」

は、神の万人に対する悲願本願である。

# ［10月16日］　主の大饗宴（ルカ14・１～24）

「恵福なるかな神の国でパンを食べる人は。」（ルカ14・15）

私はお前たちに言う「かの招いておいた者のうちわが晩餐を味わい得る者は一人もいない。」（ルカ14・24）

イエスはあるパリサイ人のの家に入った。そこでいくつかの問答をした。それを聞いて、

「神の国でパンを食べる人は恵まれた人ですね」

といった。そこでイエスは次のようなことを語った。

ある人が盛大な晩餐をもうけて人々を招待した。時刻が迫って来たので、案内の従僕を遣わした。第一の者は、田地を買ったので行って見なければならないから、と言って断った。第二の者は、五ひきの牛を買ったので、どんなかを験すために行くので、と言ってこれも招きを断った。第三の者は、このほど妻をったので参上できかねるといって断った。従僕が右の事態を主人に報告したところ、主人は怒って従僕に命じた、

「はやく街の大路小路に行って、貧者、不具者、盲人、跛者などを伴れて来てくれ」。

従僕は直ちにそのようにしたが、なほ余席がある旨を報告すると、主人は

「道やまがきの辺に行って人々を強いて連れて来て、わが家に余席が 　　ないように満たせよ。あの招待しておいた者たちの一人も私の晩餐 　　を味わい得る者は無い」。

所謂選民も所謂キリスト者も天国に入りそこなって、本当の人間が天国に入るというものだ。

私は一九四〇年以来日曜の集会をやっているが、日曜集会はキリストの霊的な饗宴で天来の力を賜るものである。この天的饗宴に右の例話のようなさまざまの理由で来ない人たちがいる。聖霊が呻いている。どなたでもどうぞ日曜の聖書饗宴に！

# （詩）主の大饗宴（ルカ14・15～24に因みて）（作詞：1986.8.1）

 歌調：「追憶」（星かげやさしく）

１．ゆたけきぞ 設けられたる

招かれたる人 使ひの者に

「田地を買ひたり 我見ざるを得ず

はゆるせよ」 たとなき招き

ああ拒めり その

２．「われ五ひきの 牛を買ひたり

これを験すため 往かざるを得ず」

「われ妻帯せり 往くこと能はず」

呼ばれし者たち 断はれりすべて

ああ何たる ことぞ

３．僕の報せを は聞きて

怒りてより 貧しき人と

身体障害の 人々を呼びて

席に着かせしが なほ余りありし

ああを 呼べり

４．アブラハムの子ら キリスト教徒

名のみの信にて サタンに負けて

世とその慾とに 心乱れなば

主の大饗宴 招かれ往く者

ああ一人も 無きぞ

５．キリストの僕！ 主の日を遵り

の霊泉に み力を受け

六日の旅路を 勇ましく歩み

道往く人にも 霊水を頒かたん

ああ饗宴の 恵み！

# ［10月17日］　盲人バルテマイ（マルコ10・46～52、マタイ20・29～34、ルカ18・35～43）

47「ダビデの子イエスよ、我をみ給へ」…

50盲人上衣を脱ぎ捨て、躍り上がりてイエスの許に来たれり…

51「わが師よ、見えんことなり」。

52イエス彼に「往け、汝の信仰汝を救へり」と言ひ給へば直ちに見ることを得、イエスに従ひて道を往けり。（マルコ10・47、50～52）

イエスは南下してヨルダンの下流、エリコの町に来た。海面下二四〇米、世界最低の町である。イエスは弟子ども及び大なる群衆と共にエリコを出ようとした。すると、路傍にいた盲人バル・テマイ（テマイの子）がナザレのイエスが通りかかると聞いて、叫び出した。

「ダビデの子イエスよ、我をあわれみ給へ」

これは全身からの叫びであった。ダビデの子とはメシヤ、救主、というのと同義なのである。

「主よ、あわれみ給へ」

である。忠犬が主人を見て、おなかがすいたといって「ワンワン」と吠えるのと同じである。ところが心なき大衆がさせようとしたが、この盲人は叫んでやまない。イエスは立ちどまった。

「彼を呼べ」

と言った。バルテマイは文字通り欣喜雀躍した。「上衣を脱ぎ捨て躍り上がって」イエスの許にやって来た。イエスの問に対して

「先生、見えたいのです！」

イエスは彼の全身的な叫びと、上衣を脱ぎ捨てて立ち向かって来たことで彼が棄身で求めているのを見たので、言下に受けとめて、

「往け、汝の信仰汝を救へり」

と言った。盲人にいきなり「往け」とは驚くべき言だ。直ちに開眼してイエスに従って道を歩くのであった。イエスの「汝の信仰汝を救へり」という言に躓いてはいけない。

「汝がかくも私を通してはたらく神の力を信じたことが、救となった」

の意である。

# ［10月18日］　パリサイ人と収税人の祈り（ルカ18・９～14）

けれども収税人は遙かに立って、目を天に向けることさえできず、胸を打って言った「神さま罪びと私をおみ下さい！」（ルカ18・13）

イエスはよくある偽善的な宗教人のタイプと正直な心の人間とを祈りの相で対比した。これは譬話というよりも一つの例話と見てい。パリサイ（人）は神殿の内庭で祈る。収税人は外庭の隅で祈っている。律法を知り、律法を遵って神の前にも人の前にも自己義認をやっているパリサイは昂然と立って心の中でこう祈った。

「神よ、私は他の人たちのように強盗や不義や姦淫をするような者で なく、またこの収税人のようでないことを感謝しています。一週に 二度は断食しすべて取得したものの十分の一を献げています」。

ところが収税人は右掲のように、すがたも心もくづほれて

「神さま、罪びと私をおあわれみ下さい！」

のほか何も言えない。魂が砕け、平伏して神にただ無条件のあわれみを願う。かかる者を神・キリストは無条件にゆるし、抱き給う。神はあわれみをキリストの十字架で決定的に与えておられる。それが贖罪である。霊的十字架を瞑想し、その下でこの収税人のようにぶっ倒れて祈ると、決定的な贖罪が与えられている霊的現実に入る。そこに聖霊が与えられる。義とし給う内容が聖霊であることに一般のキリスト教界は気がついていない。

「信仰によって義とされる」

とは、十字架の赦しの恵みを体受すると聖霊という義と愛の内実が与えられる。そうでないと信仰はいつまでも観念の域を脱し得ない。パリサイ人サウロはこれに気がついて己が義を棄てた。

# （詩）パリサイ人と収税人（ルカ１８・９～１４に因みて）（作詞：1986.8.2）

　　　　　　　　　　　　　 歌調：「荒城の月」瀧廉太郎作曲

１．パリサイ人と収税人

宮にのぼりて祈りせり

パリサイ人は立ち上がり

心の中にかく祈る

２．「神よ感謝す　我が義をば

も不義も姦淫も

のこと。

の如し　断食も」

３．見よ、はるかな収税人

平伏し拝み胸うちて

「あわれみ給へ神よ主よ

罪びと我れを」　かく祈る

４．パリサイ根性自己義認

おのが信仰誇るなり

主の本願は唯だ一つ

十字架・聖霊　受くるのみ

５．我らもつねにあるがまま

ただ平伏して祈りつつ

キリストの無者自覚して

荷ないて往かん　どん底で

# ［10月19日］　寡婦のレプタ二枚（マルコ12・41～44、ルカ21・１～４）

「この寡婦は其の乏しい中から持物の総てを、自分の生命のを皆投げ入れた」（マルコ12・44）

イエスは地上を去る時が近づいていた。彼は神殿の賽銭箱にお金を投げ入れているのありさまを見ていた。いろいろな人が思い思いに投げ入れていた。するとを身にまとったが現れた。彼女は財布をさかさまにした。レプタ二枚がの中にこぼれた。財布は空っぽになった。彼女はその二枚をそのまま投げ入れて深く祈りを捧げた。いかにもしい持ちでをおりて行った。イエスはじっと見ていた。とその瞬間すぐ弟子たちを呼び寄せて言った、

「よく聴け、あの貧しい寡婦は誰よりも沢山投げ入れたのだ。ほかの人たちはありあまるなかからいくらかを投げ入れたが、あの女は生活のを全部捧げたからだ。」

レプタはユダヤ貨幣の最低のもの、レプタ二枚は一日の糧代、それを全部捧げたので、彼女は正に自分自身を神に捧げた生命賭けの参拝をしたのであった。やもめのこのすがたがやきつくようにキリストの目にとまったのである。弟子たちよりも本当の弟子がそこに動いていたのであった。彼女は人知れず姿を消した。

新島譲がアメリカを去るに当たり、キリスト教大学創設の志を別れの挨拶の中で述べたら、献金がなされ、その中に二ドルの献金をした老人がいた。それはその時の彼の持金のすべてであった。彼は何哩かの帰り道をとぼとぼと帰ったという。貴い愛のすがたである。

我々も一日を一生として神に己れを全的に捧げる生き方を！

# ［10月20日］　十人の乙女（マタイ25・１～13）

ところで心がけの好い乙女たちは燈油を器に入れてランプと一緒に携えた。（マタイ25・４）

このキリストの譬話はマタイ福音書特有の記事である。十人の乙女の中、五人は心がけが好く、五人はぬけている。それは天国への準備のはなしである。新郎たるキリストを迎えるわけなのだが、新郎が夜おいでのようだからカンテラを用意して待つことになった。来臨がおそいのでまどろみ始めた。と夜半に

「さあ、新郎のおいでぞ、お出迎えをしなさい」

と呼ばわる声がする。乙女たちは燈火の用意をしたが、心がけのよい五人は燈火と一緒に燈油をもっていたが、ぬけた五人はその燈油の備えがないので、頒けてくれとたのんだが、そんな余分はないから、買って来なさい、と言った。不心得の五人が買いに行っている間に、新郎が来たので、彼と共に婚莚に入った。天国の門は閉ざされた。あとから五人の乙女が来て、

「主よ、主よ、開けて下さい」

とたのんだが、

「私はお前たちを知らない」

と言って断られた。

天国の婚宴に招かれる資格は何であろう。燈火と燈油は何を意味するのだろう。我々は地上のどんな物も携えては行けない。聖書すらダメである。すると魂が、魂の中にもっているものでなければならない。それは聖霊のほかにはない。燈火が聖霊とすると燈油は聖霊のでなければならない。賜は千差万別、多種多様である。それを一言で言えば、神・キリストの栄光を天賦の才能資質で具体的に体現した実存そのものであらねばならない。それは何らかの意味で世のため人のためになったはずである。自分のためではない。そういう在り方が天国ゆきの燈火燈油ではないか。

# ［10月21日］　羊と山羊（マタイ25・31～46）

「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり」（マタイ25・40）

「十人の乙女」の譬話のように、この「羊と山羊」のはなしもマタイ福音書特有の記事である。

キリストが栄光を以て、諸々の天使を率いて来臨するとき、その栄光の御座の前に諸々の国人を集め、これを二つに分けようとなさる。そのやり方は牧羊者が、羊を右にを左にしてわけるように、諸国人を大きく二分する。即ち王者が右の者たちに言う

「わが父（神）に祝福されたる者たちよ、来たりて世の創めより汝らのために備えられたる国を嗣げ。汝らわが飢えし時に食はせ、渇きし時に飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりし時にせ、病みし時に訪ひ、獄にありし時に来たればなり。」

と。すると右の者たちは、いつそんなことをあなたにしましたかと反問した。それに対しての答が右掲の言であった。即ち

「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは即ち我になしたるなり。」

弱者、困窮者、旅人、病者、被迫害者等を助けた愛の心の人々は永遠の生命を天国で与えられるが、その反対の左の者らは永遠の刑罰を地獄で受けるという。一言以て表現すれば、思い遣りあつく、愛の行為を以て具体的に、人を助けた人たちは天国人であるというので、これは世界の億万人を天国か地獄かに二分する重要な標準であるに相違ない。山上の大告白の第五

　　「なる哉、憐みある者」

である。

# ［10月22日］　ナルドの香油（マルコ14・３～９、マタイ26・６～13、ルカ７・36～50、ヨハネ12・１～８）

３イエス、ベタニヤに在まして癩病人シモンの家にて食事の席につき給ふとき、或る女高価なる生粋のナルドの香油の入りたるをたづさへ、その壺をうち砕きてイエスのにぎたり。……

８「この女はなし得る限りをなしてわがからだに香油を灑ぎ、め葬りの備へをなせり。

９誠に汝らに告ぐ、全世界いづこなりとも福音伝道のなさるる處には、この女のなしたることも記念すべく語らるべし。」（マルコ14・３、8、9）

過越の祭の営まれる春ニサンの月の十四日が近づいて来た。そしてイエスがゴルゴタへ往く日もあとにつづく。そういう土壇場の迫りを感じて、ある女（マルコ、マタイ共通）が右の場を訪れた。彼女はインドのナルド産の極上の香油、三百デナリといえば三百日間の生活費に価する香油の入ったアラバストロンを持参している。彼女はこれが主イエスとのお別れと思って、もうこの壺は要らないとの心で、壺をうち砕き、心をこめてキリストの頭上から全身に灑ぎかけた（マルコ、マタイ共通）。香油は彼女のあつき涙、あつき血潮であった。ところがそこに居合わせた者どもが、勿体ないことをするなと彼女をった。しかしキリストは、

「汝ら何を言うか、此の女は心を尽くして私の葬りの備えをしてくれた のだ」

と深い響きの声を放った。誰も自分の心境を察してくれない中で唯一人全身的な涙をもって灑ぎかけてくれた女の愛をイエスは全身で体受した。それで爆発した聖言が右の14・９。この女こそは十字架、墓場、復活の主を極めて慕った女マグダレーナと私は見る。

# （詩）ナルドの香油（作詞：1980.8.15）

 歌調：「庭の千草」（アイルランド民謡）

１．ベタニヤなる ある女

を うち割りて

主のに 心こめて

ナルドの香油を 灑ぎけり

２．主の弟子どもは これを見て

勿体なやと る

「それを売りて 貧者のため

施しごとを なすべきに」

３．主は言ひ給ふ 「この女

葬りのため わがために

涙ながらに 灑ぎたるぞ

我はほどなく 別れ往く

４．まことに告げん 全世界

いづこなりとも 福音の

伝へらるる ところにては

憶えらるべし この女！」

# ［10月23日］　洗足（ヨハネ13・１～11）

「我もし汝を洗はずば、汝われとなし。」（ヨハネ13・８）

これはヨハネ福音書特有の記事。時期はユダヤの三大節の第一たるの祭のとき。この祭は今の春分の頃。過越及びこれにつづく除酵祭の由来は出エジプト12・１～20を参照。イエスはこの過越の祭のときに最後の晩餐を思い立った。十字架の死が迫って来たので、イエスの胸にいたのが「洗足」であった。そこで晩餐に臨む前に上衣をぬぎ、手ぬぐいをまとい、に水を入れて、弟子たちの足を洗い、且つい始めた。ペテロの番が来た。ペテロは驚いていた。

「私のすることは、お前は今はわからない、今に悟るときがくる」

とイエスは言った。しかしペテロは言った

「私の足なんか、いつまでも洗はないで下さい」

するとイエスは

「もし私がお前を洗はなければお前は私と関はりがない！」

と。ふしぎな言であった。即ち、足を洗うことは、我々の罪を贖うであった。贖罪による救済のためにイエスは地上に現れたのである。洗足を拒むことは贖罪にはあづからないでいいということになる。それではキリストからの本願的関係が切れるから、キリストはこのように言ったのである。十字架の贖罪のあと、復活、昇天するキリストが約束したのは聖霊の降臨であった。聖霊が五旬節の日に降って、ペテロは、始めて、十字架の贖罪と共に洗足がその予徴であることを悟った。

# （詩）過越の祭－－洗足（作詞：1980.6.15）

 歌調：Ｓ330「あめなるわが家を」

１．の祭 近づきたり

この世を去るべき 時は近し

２．キリスト世にある おのが者を

きはまりなきまで 愛し給ふ

３．イエスには父より 父に還る

 授けられぬ

４．のの 時にのぞみ

上衣をぬぎすて 布を腰にす

５．に水くみ 僕と成り

弟子らの足をば 洗ひ給ふ

６．ペテロはかしこみ 「主よ足をば

洗ひたまはざれ とこしなへに」

７．「われもし汝を 洗はざれば

汝と我とは かかはりなし！」

８．イエスのわれらへの こそ

十字架・の なれ！

９．我らも互いに 足を洗ひ

キリストの愛を 身につけなん

# ［10月24日］　最後の晩餐（マタイ26・20～29、マルコ14・17～25、ルカ21・14～23）

26彼ら食しをる時、イエス、パンをとり、祝して裂き、弟子たちに与へて言ふ「取りて食へ、これはわが体なり」。

27また酒杯をとりて謝し、彼らに与へて言ひ給ふ「汝ら皆この酒杯より飲め、

28これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦を得させんとて流すところのものなり」（マタイ26・26～28）

の祭でを屠るべき日が来たので、イエスはペテロとヨハネに最後の晩餐の準備を指示した。二階座敷で食につく前に、キリストは弟子どもの足を自ら洗った。

さて晩餐たけなわであったとき、イエスは右掲の如く、パンをとり祝して裂き、十二人の弟子たちに順ぐりに与へて

「とって食へ、これは私の体だ」

と言い、次に葡萄酒の杯をとって謝し、この酒杯から飲め、といって、

「これは契約の血だ、人々の罪ののために流すものだ」

といって飲ませた。このマタイ福音書によると、パンに於て永遠の生命が意味され、葡萄酒に於て贖罪の血が意味されている。ヨハネ６・53～56を見ると

「人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし」

とあるように、霊的にキリストを食うことがキリストと一如の生命にあづかることになる。最後の晩餐は正に、十字架の贖罪の血と復活の生命の肉を霊的に受けよ、との聖霊に在っての祈りの現実を意味しておられた。そのような聖餐式を行うことは何も指示していない。それはむしろパウロのコリント前書11・25の言による。

# ［10月25日］　我は道なり、真相なり、生命なり（ヨハネ14・１～30）

６「我は道なり、なり、なり」

９「我を見たる者は父を見たるなり」

14「何ごとにてもわが名に在って我に願はば、我これを成さん」

16「父は他にを与へて汝らと偕に居らしめ永遠に到らしむ」

26「助主、即ち父わが名に在って遣はし給ふ聖霊は、汝らによろづのことを教へ、また我が汝らに語りしことを想ひ出さしめん」27「我れ平安を汝らにす」、28「我往きて汝らに来たるなり」（ヨハネ14・６、9、14、16、26～28）

ヨハネ14・１～16・33は所謂「イエスの訣別遺訓」で極めて重要な内容である。私はこれを「イエスの遺言」と申したい。この遺言を体受する者は永遠の生命を生きることになる。右掲の句はまことに重厚無量のもので、祈り入ってその現実に入るほかはない。

キリストの「道」は天道である。我々の地路が天道に即せんことのみ。私が「」と訳した言は一般に「真理」と訳されているが、単なるではない。神の言が体現されている実体そのものがイエスであるので「真相」と訳したい。だから

「私を見た者は父を見たのだ」

と喝破した。真相は正に真法、神法の相なのである。イエスの言は神（からの）言、イエスの業は神（の力による）業である。「父」と「我」とは相互内住であるから（14・10）。彼自身は無言、無行者、即ち無者である。イエスの名は実名だから聖名に在って祈ることは根源現実で成る。助主、聖霊が降臨すると、イエスの霊言、霊行がで受けとられ、同質のことが起きる。聖霊が内住すると、本当のがくる。この平安には力がある。人生の風波いかにもあれ、難破しない船となる。

# ［10月26日］　葡萄樹（ヨハネ15・１～13）

１「我は本当の葡萄の樹、わが父は農夫である。

５我は葡萄の樹、汝らは枝である。わが内に宿る者あらば我も彼の内に宿る。この者はに果を結ぶ。汝ら我を離れたら、何ごとも為し得ない。

７汝らもし我が内に宿り、わが言汝らの内にまるならば、何でも望むがままに求めよ、さらばそれは汝らに成就する。

９父の我を愛し給うた如く、我も汝らを愛した、わが愛の内に宿れよ。」（ヨハネ15・1、5、7、9）

キリストは自分が本当の葡萄の樹だ、と言う。自然の葡萄の樹はキリストのだと言はんばかりである。ゲーテの有名な句、

「あらゆる過ぎゆくもの（現象）は（本体の）映像たるのみ」

を連想させるすごい言だ。神はすばらしい農夫なのだ。何と楽しい言ではないか。そして私たちはその本当の葡萄の枝であるから、当然キリストに連ならざるを得ないわけである。幹があっての枝だから、樹液が流れている。キリストの生命が我々の中に流れて我々を活かしている。だからキリストの中に宿らないでは生きようもない。キリストの霊言を全身で受けとると御言が留まる。要するにキリストと相互内住内在関係、一如的な現実なのである。第九節、神がイエスの生命、光、愛、一切であることが「父の愛」であった。そのようにキリストは我々一人一人に対して全生命を与えておられることがキリストの「わが愛」である。その愛の内に宿れという。キリストは豊かな生ける宿屋である。どんな宿屋も、キリストという宿屋にはかなわない。私はこの宿屋でキリストの肉を食べ、キリストの血を飲んで活きている（ヨハネ６・53～57）。

# （詩）葡萄樹（作詞：1980.2.7）

 歌調：Ｓ48「しづけき夕の」

１．「れ我がに しかと宿らば

祈り求めよ さらば成るべし

２．み父のわれを 愛する如く

汝を愛す わが愛に居れ」

３．われ主にありて み力を受け

ひとを愛せん みは助く

４．キリストのため を賭けて

友を愛せん み霊は助く

５．「汝れは愛なり 愛の炎ぞ！

の愛を 貫き生きよ」

６．キリストこそは 霊の葡萄樹

われらその枝 は通ふ

７．生命の君に りありて

の生命を 生きてし在らん

８．「わが葡萄 わがエクレシヤ

み神の民よ 愛の光よ！

９．十字架の道 地道に歩み

使徒ら跡を ぐ者たれよ」

10.世界にる キリストの民

の愛を 生きてし往かん

# ［10月27日］　聖霊、助主、慰主（ヨハネ16・１～33）

７「けれども私は本当のことをきみらに告げる。私が去るのはきみらに益である。私が去らないと助主はきみらに来ない。私が往ったら、これをきみらに遣はす。」

33「きみら世にあっては患難がある。けれども雄々しくあれ、私は既に世に勝ったから。」（ヨハネ16・７、33）

　ヨハネ15・26に

「父（なる神）の許から私がそうとする、即ち父から出るの御霊が来ると、私について証しをする」

とあるように、聖霊はキリストが十字架の贖罪死を遂げたあとで復活昇天してから臨む霊であって、地上のキリストから直接には来ない。このことは極めて大切な真法なのである。一般に真理と訳される「アレーテイア」はかくれたるものごとがあらわにされた事態をいうので、本当のこと、本当のもの、真法という意味で、真理というような観念的なひびきとちがう。「助主」とは弁護のために側に呼び出された者の意で、慰め主とも言われる。我々罪びとの側に立って執り成して助け慰め給うみ霊が聖霊であって、正に十字架の贖罪愛を果たしたキリストの霊と同質なのである。であるから十字架を信受、体受すると聖霊が臨んでくる。十字架と不可離の霊が聖霊なのである。このことは銘記しなければダメである。

「私が去るのはきみらに益だ」

とはこの事態をいう。運命、環境、患難、迫害、何が襲って来ようとも聖霊は逆に力強く助け給う。だから聖霊を身に宿すことが何より重要なことなのである。私というからだは聖霊の幕屋、宿屋である。だからキリストと偕に勝てる。雄々しくさせられる。

# ［10月28日］　大祭司の祈（ヨハネ17・１～26）

1イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言ひ給ふ「父よ、時来れり、我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り給へ。

18汝我を世に遣はし給ひし如く、我も彼らを世に遣はせり。

21父よ、汝我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。

22我は汝の我に賜ひし栄光を彼らに与へたり。これ我らの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。

23即ち我彼らに居り、汝我にまし、彼ら一つとなりて全くせられん為なり。（ヨハネ17・1、18、21、22、23）

ヨハネの伝えたキリストの遺言（14、15、16章）が終わって、イエスが天を仰いで叫ばれた大祭司的な執り成しの祈りが第17章全部である。その中の数句を右に掲げたが、キリストの祈りのこころは父子（神とイエス）一体一如の如く、神、救主、使徒弟子どもが一如一体とならんことである。神・キリスト・聖霊が三位一体であるように、神・救主・キリスト者が聖霊の媒介によって一如となる。個人としては神・キリスト・聖霊・我という四位一体の生き方である。聖霊に在って生きることなくしてこれは本ものとならない。聖霊は我々を「本ものたらしめる霊」である。「真相を現ぜしめる霊」である。

# ［10月29日］　ゲッセマネの血祷（マタイ26・36～46、マルコ14・32～42、ルカ22・39～46）

38「わが魂深く悲しみて死ぬばかりなり。汝ら此処に止りて我と共に目醒め居れ」

39（イエス）少し進みゆきて平伏し、祈りて言ひ給ふ「わが父よ、もし得べくば此のを我より過ぎ去らせ給へ、されどわがうままに非ず、汝ののままに。」（マタイ26・38～39）

イエスは十字架の贖罪死を何によって自覚されたか。それはイザヤ書の第53章によってである事は疑いの余地がない。

彼は侮られて人に棄てられ、…彼はわれらの罪のためにけられ、我らの不義のために砕かれ、自ら刑罰を受けてわれらに平安を与ふ」（イザヤ53・３、５）

が特にその預言の焦点である。

そして十字架と復活を弟子どもに三度び予告した（マタイ16・21、17・９、20・18）。しかしいよいよそれを父神への祈りに於て決定的に体受し給うたのが、エルサレムの東方ケデロンの谷を渡って入るオリーブ山林の中のゲッセマネ（「油しぼり」の意）の血祷に於てである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネも共にいたが彼らは魂が眠っていた。天から御使が現れてイエスに力を添えたが、イエスは祈りに於て文字通り油汗をしぼられ、滴る汗は血の雫の如くであった（ルカ22・44）。正に血祷であった。いきなり天界にエリヤ以上に昇るべき人が、贖罪のため十字架されねばならないという人類の歴史を両断する瞬間の祈りであった。人間イエスは三度同じ祈りを祈り、死の苦しみをここに受け、自己の願に死に、神の本願の化身となったイエスはユダの裏切りを受けローマ兵に泰然として捕らわれたのである。

# ［10月30日］　十字架（マタイ27・15～26、マルコ15・６～15、ルカ23・13～49、ヨハネ19・17～30）

20祭司長、長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡ぼさんことを勧む。

21総督（ピラト）答へて彼らに言ふ、「二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか」彼らいふ「バラバ」。

22ピラト言ふ「さらばキリスト（メシヤ）とふるイエスを我らいかにすべきか」。皆いふ「十字架につくべし」。（マタイ27・20～22）

民の長老たち、祭司たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔され、弟子の長ペテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、囚人に上まる極悪人とされ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、衣をはぎとられ、緋色の上衣を着せられ、荊の冠をかぶせられ、「ユダヤ人の王、安かれ！」と嘲弄され、再び上衣をがれ、血の雫と汗が顔に流れ、傷だらけのにされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のの丘へと、ヴィア・ドロロサ「苦難の道」をよろめき辿らしめられゆくイエス！

人間の、人類の、世界歴史の過去、現在、将来の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の、悪魔的、地獄的、闘争的、虚偽と混沌と矛盾と攪乱の実相の逆徴が、イエスの、キリストの、十字架を負い給うこの姿である。

十字架されたイエスの宝血がゴルゴタの土に泌み入る。誰か知らん

「人類の罪を負う神の羔」

なる文字がキリストの血で大地に書かれていたのだ！

# ［10月31日］　今日私と一緒にパラダイスだ！（ルカ23・39～49）

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（ルカ23・43）

ゴルゴタの丘の上にキリストの十字架に並んで右と左に十字架が立っていた。一方の悪人はイエスに不遜にも

「あんたはキリストじぁないか。自分と俺たちを救え！」

といた。すると他方の悪人がめて

「お前は同罪のくせに、神を畏れないのか、俺たちはやったことに対する報いを受けているのだから当然なことだが、この人は何にも悪いことはしていない」

と言い、更にキリストに向かって、

「イエスよ聖国にお入りになるとき、どうか私を憶えて下さい」

と懇願した。この悪人は、最後の瞬間に神を畏れ、罪を悔い、キリストに、心砕けて、私を憶えて下さいと告白した。

　キリストはその言下に、

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒にお前はパラダイスだ！」

と。この一言はキリストが吐露した言の中で最も慰め深い救いの言ではないか。私も人生の終りの瞬間に、この罪びとと同じ聖言を賜りたい一念である。キリストのどん底の思い遣り、白熱の愛、深い泪をうちにふくんだみ言を賜って天界に飛んでゆきたいものである。若し墓碑が立てられるなら、キリストのこの聖言を刻んでもらいたい。

　そして毎日

「今日汝は我とパラダイス」

の聖言の中を歩いて往こう。

人類をもし二分する基準があるとすれば、神の前に平伏す魂と神の前に平伏さない魂の二分ではないか。傲慢な魂はサタンの国へ、平伏す魂は神の国へ。天国、極楽か、地獄、蔭府かである。しかしまた中間の人間もダンテが言うように案外多いのであろう。ともあれ、毎日がキリストと共に天国である在り方がある。み霊のお宿の人たるのみ。